

■学位論文内容要旨

母子通所施設における遊びを通しての療育方法の検討

—母子関係に着目しての実践分析より—

生田 良美 (2017年度修了)

【研究の背景と目的】

母子通所施設は、乳幼児健診時に指導を受け、母子が共に通所する施設である。療育は度重なる法改正のもと現在に至っている。近年「療育」と銘打って、スキルアップのための個別訓練や塾、習い事をおこなう事業所も各地に存在する。

子どもの特性からくる育てにくさを抱え、関係性が乏しくなっている母子関係を再構築し、養育者の子育て力を高め、子育ての楽しさが実感できる療育の場を保障することが求められている。子どもの発達保障を踏まえ、母子通所施設の療育プログラムに、養育者を位置づけ、支援者とともに子育ての楽しさが実感できる療育の方法や質を検討する時期であるといえる。

本研究では、母子通所施設に通所する自閉症の特性を有している子どもと養育者との関係性に着目し、全体の療育プログラムとは別の時間枠に、個別の遊びのセッションを設定した。遊びの実践分析だけでなく養育者の気持の変化・子どもの発達・愛着関係も総合的に分析する。そのことによって、遊びをとおして情動的な関係を形成する効果的な療育方法を検討することを目的とする。

【研究の方法】

研究方法は、以下の3つである。第1に母子通所施設の実態を踏まえ、母子通所施設における療育に求められていることを整理する。第2に、アタッチメントや子どもの遊びに着目し、母子関係を把握する視点の提案をする。第3に、全体療育の時間枠ではなく、別の時間に、

個別の遊びのセッションを実践保育士が母子間を支援して3者にて分析する。

個別の遊びのセッションにおける養育者の参加方法は、第1段階の観察、第2段階の部分参加、第3段階の養育者主導の3段階である。各段階は、2回試行する。1クールは、6回試行となり、それを3クール取り組む。各セッション終了時に養育者から感想を聞き、1クール終了時にアンケート用紙を配布し後日提出する形態にて取り組む。3クール終了後、選択の遊びのセッションを行う。選択の遊びのセッションとは、子どもが遊びの中心となる玩具を2種類（車かままごと）から選択し、養育者が遊びを支えるグッズを状況判断し子どもの遊びに導入する。選択の遊びは、子どもと養育者とのかかわりを軸に取り組むが、遊びの状況を観察し必要に応じて支援者が参加し支援する。この2形態の個別の遊びのセッションを実践し分析する。

母子関係の様相を明らかにするには、養育者の気持の変化に視点をあてる必要があると判断し、セッション後の感想やアンケートに記載された内容を含め、総合的に分析しフローチャートを作成する。フローチャートでは、遊びの状況について、支援者や養育者の行為のほかに、子どもの行動を「貸す—貸さない」「模倣」「かかわりかた」「場面の切り替え」の4つの視点と、情動の表出も合わせ分析する。これらを1クールごとにまとめ、3枚

表 1 クールの遊びのセッションの内容

回数	各回の目標	座位	共感
第1段階 (2回)	微笑んで『子どもの遊びを観察してみよう』	正面 (対面)	言葉をかけてみよう 「楽しかったね」「できたね」 「面白かったね」等
第2段階 (2回)	微笑んで『仲間入りし、子どもの遊びを真似てみよう』	正面 (対面)	言葉をかけてみよう 「楽しかったね」「できたね」 「面白かったね」等
第3段階 (2回)	微笑んで『一緒に遊んでみよう』	側面	言葉をかけてみよう 「楽しかったね」「できたね」 「面白かったね」等

のフローチャートを作成する。選択の遊びの状況も、子どもの行動、養育者の感想を1枚の表にまとめ、これらを総合し分析する。

【研究結果】

本研究は母子関係と遊びに着目し「遊び」と「愛着」に視点をあて、個別の遊びのセッションに取り組む前後で比較分析をおこなった。セッションに取り組む前の対象児の愛着段階は、それぞれの段階にあり、遊びの発達段階は、愛着段階の1段階前にあることが明らかになった。これは5名に共通していた。

セッション後の愛着段階と遊びの段階は、どの子どもセッション前と比較すると、1段階から2段階の発達が見られ、しかも愛着と遊びの段階の差が縮まるケースもあった。

個別の遊びのセッションに取り組むことで、遊びの段階が情動的交流遊びから、物を介したやりとりや手で操作することによって象徴遊びへと発展した。情動的なコミュニケーションが可能となり遊びが発展するには、以下の条件が必要であることが示唆された。①子どもと養育者の遊びを支える支援者②子どもと養育者の関係をつなぐ玩具の2つである。

支援者が、心がけたことは以下の5項目である。(1)子どもの遊びに参加し楽しむ(2)子どもの好きな要素を遊びに導入する(3)表情豊かに向き合い、情動の表出を支える(4)みだての要素を遊びに入れる(5)養育者の遊びを尊重し支えることである。中でも養育者に対する支援を意識したことは効果的であったと考えられる。

玩具に関しては、見てわかり手で操作できる立松が述べている教材・教具に相当する玩具を使用した。子どもが玩具を操作する時に、行為の意味づけ・共感・承認する支援者が寄り添う。操作終了時には、認め共感する養育者がいる。そして、支援者は子どもの遊びの中に、みだてるきっかけや要素を取り入れ、遊びを展開する。個別の遊びのセッションは、子どもと支援者との遊びを養

育者が観察する段階から、部分参加を経て養育者主導となる。段階を踏むことで母子間での相互作用が起き、情動的なコミュニケーションが深まり、愛着段階の発達に繋がった。結果的に養育者の意識も変化し、支援者とともに子どもとの相互作用が起きたと考えられる。そして、複数の支援者がかかわることで、複数の人が特定の相手として形成され、愛着段階が発達した。結果的に愛着段階の発達だけにとどまるのではなく、生活及び遊びについても発達したと考える。

以上のことから、母子通所施設における療育プログラムには、楽しい経験に焦点を当てるだけでなく、支援者である保育士に支えられながら、母子間での情動的なコミュニケーションにつながる、手で操作できみだてることが可能な玩具を介して、楽しい遊びをすることが必要である。そのためには、個別のプログラムとしての位置づけも必要であるといえる。このように、本研究は母子通所施設における療育のプログラムの内容に示唆を与えることになったといえる。

【今後の課題】

今後の課題は3点である。①教材・教具の研究を継続し、具体的なプログラムを考案する②分析ができなかった残り9名の分析を行ない、比較検討をする③子どもの成長と養育者の意識変化を縦断的研究する。

上記の3点の継続研究をおこない、具体的な母子通所施設の療育プログラムを開発し、療育の質を問いつけることが今後の課題である。

【主要参考文献】

- ・高橋修「自閉症とADHDの愛着の発達について」『そだちの科学7』日本評論社 2006
- ・立松英子『発達支援と教材教具 子どもに学ぶ学習の系統性』ジアース教育新社 2009
- ・伊藤良子「発達障害児における遊びの発達の意義」特殊教育研究施設報告42 1993
- ・別府哲「話し言葉をもたない自閉症障害幼児における特定の相手の形成の発達」『教育心理学研究』第42巻第2号 1994